

2005年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2005年9月2日(金)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A (徳島県教育委員会派遣社会教育主事)

パネリスト B (止揚の会代表)

C (たんぼぼの会代表)

D (徳島市立応神中学校教諭)

《司会者》

ただいまより、2005年度人権地域フォーラムを開催いたします。本日のテーマは、『ひとつと』から『わがこと』へ ～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～ です。

それでは、本日も登壇いただきます方々のご紹介をいたします。

コーディネーターとして、本日もフォーラムの進行をしていただきますのは、徳島県教育委員会生涯学習政策課派遣社会教育主事のAさんです。(拍手) 続きまして、パネリストとしてご発言いただきます方々をご紹介します。お名前をお読みいたしました方は、恐れ入りますが順次壇上の席にお進みください。『止揚の会』事務局、Bさんです。(拍手)次に、『たんぼぼの会』代表、Cさんです。(拍手)同じくパネリストの、徳島市立応神中学校教諭、Dさんです。(拍手)

(全員が登壇し、席に着いたことを確認し)以後の進行につきましては、A先生よろしく申し上げます。それでは皆様、よろしくお願ひいたします。

《コーディネーター A》

皆さん、こんにちは。(会場より「こんにちは」)会場いっぱいの皆さんに見つめられて、すごく力をいただきます。「人権」を掲げた研修会に、人が生き生きと集っていく。そんな学びの場が、各町や地域で広がっていくことを念じます。

「人間が人間として幸せに生きる」、そんな私たちの関係性が広がっていくというか、あたりまえのように実現できる、そんな「人権のまちづくり」を、皆さんと共に創造していきたいと思ひます。非常に窮屈で息苦しい方もおられると思ひますが、楽しい時間になればと思ひます。

昨年度の、「人権地域フォーラム」では、「峠を越えて」というビデオを、最初にここで観ていただきました。そのビデオに登場しました青年達が、パネラーの発言の後、様々な思ひや願ひを、また、現実を語ってくれました。一人一人の語り語りを生んでいきます。そこに、非常に厳しい現実があります。

それぞれの町に、やっぱり課題があると思ひます。その課題を出し合いながら「私たちに何ができるか」ということを問ひ続けていく。その問題を、課題を解決することを通して、私たちの命が輝く。そこに暮らす人々の命が輝いていく。そんな取り組みが広がっていく。今日もそんな時間になればと思ひます。

「ひとつとからわがことへ」というテーマを、昨年を引き続いて掲げさせていただきました。ついていくことは簡単ですけど、なかなか自分の問題にはなれません。これは、「同和問題」だけではありません。いろんな「人権の課題」というのは、その立場にならなければ、その「痛み」というのは自分のものにはならないんです。この「人権の学び」というのは、やっぱり、私につながる一人一人の切なさや悲しみが、「私

にはわかっていない」ということがわかるんです。そこから始まっていくんです。そんな学びの場ではないかなということを実感しています。

自己紹介が遅れましたが、私は中学校の現場で、ずっと中学生との取り組みがあります。この「派遣社会教育主事」という立場になって、3年目になります。昨年、今年と、『松茂町』『板野町』で人権啓発を担当させていただいています。

その中で、私が中学校現場で取り組んでいたように、「行政職員の研修」、「企業研修」の中で、そこに集まった「一人一人のいろんな思いを語り合っていく」「いろんな願いを語り合っていく」「いろんな現実を語り合っていく」。そんな研修会を作っています。

ある「企業の研修会」に出た時に、50名余りのそこの企業の職員らが集まっていました。2時間あまりの研修会です。始まる前から、前の方でベターと寝ている20歳そこそこの青年がおるわけです。「どうしたんや」と声をかけました。この取り組みは「寝た子を起きなければなりません」から。(笑い)

そうすると、その青年はこう答えました。「先生、僕はこの研修は寝ることにしているんだ。」

どうしてかと問うと、「意味がない。差別は絶対なくならない。」と胸を張りました。「ここで自信持つなよ」と思うんですけど、そこでも、どうしてかと問うと、その青年は、正直に、素直に返してきました。

自分の家族の中にある、非常に厳しい差別の現実を素直に表現しました。「じゃあ、それをぶちまけてみんか」という話をしたら、乗ってきました。私が2時間近く話をさせてもらって、後半、お一人お一人に発言を求めたら、その彼が、3分4分かけて自分自身の「この学習に対する『無力感』、でも、その中で「何とかしたいという気持ちも多少はある」という部分を表現したんです。

その企業の中には、同和地区出身の方もおられました。「その発言をどういうふうにかかれたかな」と思いながら、意見をずっと聞かせていただくわけです。ひたむきに思いを返していかれました。あつという間の2時間半の研修でした。

聞いて終わりではなくて、聞いて感動したではなくて、その、聞いたことで自分の中に広がった思いを、「自分の言葉」で語っていく。それを「どう聞いたか」ということを返していく。そのことを通して、そこに集まった人間関係が豊かになっていく。そんな話し合いができたらなあということを感じます。

今、私が手に持っております本は、本年4月に松茂町の町民全体に配布された、『みんなで学ぼう人権問題』という、松茂町発行の冊子です。この中に、小学生・中学生の「人権作文」が掲載されています。見事に一人一人の生活を語っています。そして、この冊子の中に、私が、松茂町内の3つの小学校で、卒業を間近に控えた時に、6年生の子ども達と語り合う学習をやらせていただいた。その感想のいくつかを入れていきます。その中には、「自分自身」を表現してくれる。また、私の語りを受けて、「自分の思い」を語った、また、語ろうとした。今まで「恥ずかしい」と思ったことが、全くそうではないということに気づいていく。そんな子ども達の姿が綴られています。

私たちの中に、子ども達の中に、「生きる自信」がきちっと育っていく。これが人権の学びの本質だと思います。この中からひとつ、小学校6年生の子どもの、精一杯の思いを皆さんにお届けして、3人のパネラーの語りにつないでいきたいと思います。6年生の子がこういうメッセージをくれました。

=今、A先生に伝えたいこと=

「私は、お父さんのことを恥ずかしいと思ってきた。仕事をしていないし、みんなのお父さんとは年が違う。みんなのお父さんは40代だけど、私のお父さんは50代後半だ。だからみんなのお父さんがうらやましい。仕事をしていないお父さんなんて嫌だ。

みんなが『お父さん今何歳?』とか『何の仕事をしよん?』とか聞いたら嘘をついてしまう。だって本当のことを言ったら笑われてしまいそうだから…。

でも、A先生が自分のお父さんの話をしてくれて、今までは、『恥ずかしい』と思っていた気持ちがだんだん小さくなっていった。A先生が言うように、『人間は変わるし、自分に自信や誇りを持つていくことができる』と思った。

そう考えると、人間は別に年をとるものだから、気にすることはない。よく考えてみると、仕事はしていないけど、家のこと(家事)は、お父さんがほとんどしている。洗濯、食事、買い物、壊れたものをなおす等、いっぱい頑張ってくれている。

お母さんが忙しくて、疲れて仕事から帰ってきたとき、もう食事ができている。そんな時、お父さんが輝いて見える。私は、A先生の話に応えるためにも、そんなお父さんのことを言おうと思った。でも、もう一つ勇気が出ずに、そのまま終わった。だから、私はこの文章を通して、A先生に思いを伝えたい。」

語り合うやり取りの中で変わってきます。なかなか踏み出せなくても、そのことを「深く自問自答して綴る」という作業で、また癒されていく。解放されていく。この、子ども達が変わっていく姿というのは、私たちにそっくり重なってくると思います。

ここに集まった200人を超える人たちも、立場があると思います。生活があると思います。置かれている状況はみな違います。その違いを認め合いながら、その思いに寄り添いながら、お互いが、出会えてよかったという「信頼と尊敬の関係性」を作る。人間とは尊敬し合うものです。信頼し合うものです。

『水平社』の時代、それは非常に厳しい差別の時代です。あの、厳しい中であって、「人の世に熱あれ人間に光あれ」と謳いあげた。あの、「人間を尊敬する」「人間を信頼する」。そういう社会の中で、「本当の人間の解放」があり、様々な差別の解消がある。そんな取り組みを、皆さんと確かめ合う、これからの時間になればと思います。

一人の語りを20分くらいにまとめながら、これから、3人のパネラーにそれぞれの思いを話していただきます。本当に多彩なメンバーが集まっています。

最初に話をしていただきますのは、Bさんです。格好いいですね。彼の、こういうネクタイを締め、スーツを着ているという格好はなかなかないです。相当張り切っていますよね。(笑い)いつもこういう格好をしているのならわかります。まあ、「今日だけ」と頑張ってきたんですね。この若者の意気込みを受け取ってやってください。その語りに、会場の皆さんが何か返してやってください。それは「綴る」という作業でも、「言葉」でも、休憩時間にちょっと声をかける。帰りの時にちょっと声をかける。そのやり取りが人に力を与えます。

「差別」や「いじめ」というのは人間関係の中に起こります。人間関係が豊かになった時に、その問題は見事に克服されます。そんな、これからの時間にしていきたいと思います。

まず、「止揚の会」という、私にとって、ずっと大切に思っている「青年の集い」があります。鴨島第一中学校の元校長先生で、私の「教育の原点」である佐藤文彦先生に名づけていただいた、青年の同和問題解決に向けた学びの場があります。その「止揚の会」の事務局を担当しています、B君が語ります。

今日、この会場に彼女がおるそうです。まあ、言ってしまいましたから。今から彼のいろんな思いを聞いてやってください。それでは皆さん拍手をお願いします。

《パネラー B》

はじめに

(元気よく)皆さん、こんにちは。(会場から一斉に「こんにちは」)吉野川市から来ました。Bといます。先ほど紹介していただいたんですが、紹介しなくていいことまで紹介していただいて。(笑い)こんなスーツを着て、暑苦しい格好をしていますけど、僕の話は、結構「クールビーズ」な話が多いので、落ち着いて聞いて下さればと思います。

今日、A先生に、この会の参加への声を掛けていただいたのはですね、今年3月に、吉野川市で、『第1回吉野川市人権教育研究大会』があり、今日と同じような人権フォーラムをおこなわれました。その時にパネラーとして参加し、好評をいただきました。前の4名のパネラーがしゃべった後、マイクを会場に預けました。マイクが最後まで帰ってこなかったんです。そういう熱い会になりました。

A先生から、「B、鳴門ででっかい授業をするから力を貸してくれ。」こう言われたんですね。(笑い)A先生は、ここを「教室」だと思って、いつも、こういう会をコーディネートされていると思うんです。

A先生との出会いは、僕は高校3年生の時に、今、こうして隣に座っている、この50cm位の距離で、A先生がアップで、僕の目を見ながら話をしてくれました。この顔で、この距離で、目を離したら「何か言われる」「言われる」と思いましたね。(笑い)2時間、最後まで、目を離さずに聞きました。

今日は、そのA先生から、「力を貸して欲しい」ということだったので、僕は自分の同和問題との出会いと、初めて「ひとごと」から「わがこと」になった時のお話をしたいと思います。

同和問題との出会い 高校3年の時

私の「同和問題との出会い」というのは遅くて、高校3年生の時です。自分が山川町の被差別部落に生まれながら、高校3年生の時まで、自分が「被差別部落の人間だ」ということを知らずに育ちました。

それはなぜかと言いますと、うちの町にも、学校が終わってから同和地区の子どもに差別をなくす力をつけていく、「学習会」という場はあるんですけど、その「学習会」に、学校の人権教育主事の先生が、「お宅のお子さんに差別をなくしていく力をつけるために、学習い会に来させてくれませんか」と、僕の家は何十回も足を運んでくれたそうです。でも、うちの親は、「絶対に行かさない」と言い続けたそうです。

うちの親は、「学習会に行かすことによって、息子に被差別部落という名札を貼ることにつながる。だから絶対に行かさない」と言い張りました。僕は家庭の中でも、マイナスイメージというか、「同和問題」という話は全くないんですね。その中で育ちました。「ひとごと」としてずっと育ちました。

皆さんに聞いてみましょうか。皆さんは、「同和問題学習」「人権問題学習」が好きですか？嫌いですか？どちらかに絶対手を挙げてください。「どちらかと言えば好きだなあ」という人、手を挙げてください。ありがとうございます。では、「どちらかという嫌いなあ」という人、手を挙げてください。(どちらも少数ずつ手が挙がる)おかしいですね。(笑い)あのね、僕は正直な人が大好きなんです。

皆さん、こういう質問をすると、胸が苦しいと思うんですけどね、これを全国の小学生・中学生・高校生に聞きますと、約97%の子ども達が「どちらかという嫌いなあ」の方に手を挙げます。これはね、一生懸命同和教育をされているところでも同じです。「先生は語っているんですけど、子ども達はそう思っていない。」そういう状況があります。

私もそうです。高校3年生の時に、僕の恩師である同和教育主任の先生が、僕を会に誘います。「B、おまえ会があるから行ってみんか？」僕が「え？何の会ですか？」と聞くと、先生は「同和の会だ」と言われるんです。僕は正直に言いました。「え？僕そういう会は嫌いなんですよ。」そうしたら、先生は「まあ、騙されたと思ってついて来い」と言われて連れて行かれました。

芝原の青年会館での他校の高校生との出会い

だるいと思いつながら連れて行かれたところが、徳島市の国府町にある「芝原」という所です。今、「部落の伝統文化を継承する」ということで、辻本一英さんという方が「恵比寿舞」という人形を使った伝統芸能をされています。その「芝原」という所の、ログハウスみたいな『青年会館』に連れて行かれました。

県下から、40名くらいの高校生が集まっていました。県下のいろんな所の子がいて、熱く語っているんですね。その語りをよく聞いていたら、「同和問題学習」「道徳」の時間のことを話しています。僕は下を向い

たまま話を聞いていて、「うわあ！！場違いなところに来てしまったなあ。当てられたらどうしよう…」とっていました。

その、みんなの語っている話の内容は、「自分のクラスに障害のある子が居るんだけど、その障害のある子は、やっぱりいじめを受けているんです。そのいじめを自分は止めに入りたいんだけど、止めに入ると、「何を言いカッコして」ということで、自分もいじめの対象になるから、それが怖くていじめを止めに行けない。そんな自分を自分がものすごく嫌だから、『自分は注意できる』、そういう勇気を持って明日学校へ行きたい。」という「決意表明」をしています。「何でそんなに自分の嫌いなところ、だめなところをみんなに話すのかなあ」としていました。自分の嫌なところ、だめなところは、黙っていたらわかりません。

ある子は、「自分が被差別部落の人間だということをみんなに言った。」と言いました。「ええっ？」と思いました。話を聞いていたら、「今まで下を向いていた子が、自分のことや自分の親の結婚差別の話をしたら、パッと顔を上げた。それで一生懸命話を聞いてくれるようになった。思いを返してくれるようになった」と言うんです。「そんな夢のような話があるわけないだろう」と、僕は思っていました。そうしたら、鴨島町のある女の子から当てられたんですね。「B君のところの学校って、どんな取り組みをしているの？」そう聞かれて、僕は正直に言いました。「担任の先生が資料を配って、感想を書いて終わりや」と言ったら、「そんなのあかんよ。そんなのではみんな寝よるだろ」と、ぼろくそに怒られました。確かにみんな寝ているんですね。でも、「初対面のお前に、何でそんなに怒られないかんのかな」と思いながら話を聞いていました。

その時、怒られたんですが、「どうってことのないくらいの人権意識」しかなかった当時の僕にもわかったことは、「あ、この子らはすごいことを言いよるな。この子らは、今までに会ったことのない子らだな」ということです。何よりも、僕にはこの子らが輝いて見えたんです。だから、僕は、何か変な奴らだけど、興味があるからこういう会に行ってみようかなと思いました。

この出来事があって、毎週土曜日、日曜日は、徳島県内各地でおこなわれる研修会やいろんな会に出かけに行きました。その中で、僕は自分で、「自分が被差別部落の人間である」ということを、誰にも言わずに自覚します。いろんな会に参加する中で、僕は徐々に成長して、「自分のことを高校のみんなに言いたいなあ」というくらいのレベルまでになりました。

高校3年生 校内人権集会での自分宣言

僕の通っていた高校では、1年に1回、「人権集会」というのがありますが、僕が高校3年生の時の、校内の「人権集会」で、体育館の全校生徒の前で、15人くらいの生徒が、「同和問題意見発表会」のようなことをして、作文を読んでいきます。そうしたら、前で話をしてくれる子は、みんな「自分のこと」を言いながら、すごくいい話をしてくれます。でも、聞いているみんなは、「同和問題学習」は嫌いだから、最初の10分くらいしか話を聞いていないんです。段々に下を向いて、早く終われという雰囲気が体育館の中に流れてきます。

僕はその時、「今しかない」そう思っていました。人権委員会の子が「何か意見や感想はありませんか」と言っても、毎年何もありません。僕はその時、「はい」と手を挙げました。

そして、体育館の一番前まで来て、マイクを持って、みんなの前でこう言いました。「僕は、今、みんなが話をしている被差別部落の人間です。」そうしたら、ザワザワしていた体育館がシーンとなりました。「ええっ？」みたいな感じです。これは、良い意味で話ができる体制ができたということなんです。

僕は、小学校・中学校の時にいじめを受けたこととか、今、部落差別にはこういう事例がありますよという話を、みんなの前でしました。自分の弱さを語る時に、人間は必ず目から汗がこぼれます。僕はいつも「心の汗」と呼んでいますが、自分の壁を乗り越える時、涙がでます。泣きながらみんなの前で話をして、最後

に他愛もない一言をこう言いました。「部落差別は今もあるけど、ここにおるみんなだけでも一生懸命考えていったら、部落差別は少しずつでもなくなっていくと思います。」

15分間くらいしゃべった後、僕は泣いているから、話し終わっても恥ずかしくて、自分の席に戻れないんですよ。だから、体育館の一番後ろまで行って、後ろの壁にもたれて体育座りで座っていました。

友の発言で一気に変わった体育館の空気

会場はシーンとしたままです。「うわあ！！変なことを言ったかなあ。言わんほうが良かったかなあ」と思っていました。しばらくして、同じクラスの仲の良い子が、「はい。マイクを貸して下さい。」と言うんです。普段は、絶対に手を挙げないおとなしい子です。その子が、マイクを持ってこう言いました。「僕は、ピーマンが嫌いです。」僕は、「ええっ??」と思いました。その子は続けてこう言いました。「僕は、野菜が全般的に嫌いなんやけど、これからは食べてみようと思います。」

僕が話した時には、シーンとしていたんですが、その子が話した瞬間、体育館の中は大爆笑です。僕は、その子といつも一緒に昼飯を食べていたんですが、その子の弁当の中身は、365日、毎日同じなんです。その子は変な奴だったんですけど、ご飯と、ミートボールと玉子焼き、365日ずっとこのメニューです。その子は、野菜は全般的に嫌いでしたが、ピーマンは宿敵中の宿敵でした。

その子は、「ピーマンが嫌いだ」ということが言いたかったのではないんですね。同和問題学習をピーマンに例えて言ってくれたと思っているんです。「僕は今まで、同和問題学習、人権学習は、ピーマンと同じで食わず嫌いだったけど、これからは、少しずつでも勉強してみようと思う。」そう言ってくれたと思うんです。その子のおかげで、体育館の中が熱気に包まれ、「人権集会」が終わっていきました。

僕はどちらかというと、さわやか系で、体育界系で、(笑い)何で笑うんですか。体力はあって、バスケットの試合を3試合しても絶対に負けないんですけど、たった15分自分のことをしゃべるだけで、もう、へとへとです。僕が後ろに座っていたら、みんなが僕の周りに寄ってきてくれたんです。僕の周りに円ができるんですね。僕が座っていたら、みんなが一人ずつ「思い」を言ってくれたんです。

「B、感動したわ。」「(部落であるとかないとか)そんなことは関係ないわ。もっと早く言ってくれたらよかったのに。」等々、それぞれの思いを言ってくれました。ある子は、自分の家族の差別心を語ってくれました。晩飯を一緒に食べていると、お父さん、お母さん、お爺さん、お婆さんが「部落の人には気をつけないよ」「事故を起したりしたら怖いぞ」「結婚の時でもちゃんと調べてから結婚せよ」。日常的に、こういう形での会話を聞くそうです。

その時に、その子は、部落の人というのはあまり会ったことがないから、こんなふうによくにいても知らないから、「へえ、そうなんだ」と思っていた。僕が部落の人間だということを言ったら、「ええっ?」と驚いて「おまえがか?」と思ったそうです。「この時に、親の言っていることは間違っているんだなど、初めて気づいた。そういう親を変えていきたいから、いろいろまた教えて欲しい。」こう言ってくれました。

僕は、自分のことをしゃべったかわりに、その子達が、心の奥底の思いを返してくれたと思います。僕はその時初めて、「人間って温かいなあ」と思ったんですね。「ひよっとしたら、これが本当の同和問題学習、人権学習っていうのかなあ」と思いました。僕は、この時に感じた、「この体育館の温もりを、これから全国の後輩達に返していけるような人間になりたいなあ」と思った時に、僕の同和教育がスタートしました。それが「ひとごと」から「わがこと」へ変わった、僕の一番の原点だったと思います。そういう中で、A先生とか、いろんな出会いがありました。その出会いがあって、今、ここに立っていると思います。

今日も、遠くは鳥取から来ておられる方もあります。小豆島から来ておられる方、愛媛県から来ておられる方もあります。こういう、いろんな出合いを大事にしたいと思います。また、後でしゃべりますので、とりあえずこれくらいにしておきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

前にラジカセがあります。最後に彼が歌いますので、ものすごい楽しみにしててください。(笑い)私は、彼を高校3年生の時に知って、「かっこええ奴だなあ」と思いました。あの時に感じたかっこの良さは、見た目もかっこいいですけど、見た目だけではありません。本当に輝いていますね。当時の高校生が、やっぱり、こうつながって行って、それぞれの地域で取り組みを続けています。

いろんな「課題」があります。でも、その「課題」を解決していくという中で、命というのはこんなに輝いていくんだなと思います。それはやっぱり、この教育の可能性だろうと思います。私たちの本気の語りが、周りにおる私たちの家族や職場の仲間に何かを残していく。その何かによって、また私たちが変わられていく。「本気で語る」ということは、誰かのためではなくやっぱり自分が豊かになっていく。そんな営みを大事にしていきたいと思います。

この中にも、様々な活動をされてきた方がたくさんあります。例えば、子どもさんが小学校・中学校の頃にPTAの活動をされた方もおる。私にも2人娘がおりまして、PTAの役員をやったときに、役員の依頼を受ける条件に「同和教育推進委員だったらやらせてください」と言いました。今でしたら「人権教育推進委員」です。「それだったらすぐなれます」と言われました。なかなか自分のことにならない現実もあります。でも、やっぱりそこに集まって来たら、役員の人達と本当に感動を共有し合えます。

「たんぼぼの会」という、人権教育の活動でつながった仲間の「自主活動」があります。鳥取県の倉吉で、そういう活動をしている仲間と6年ずっと交流しています。その取り組みというのは、やっぱりPTAの活動が出会いです。その出会いが確かなつながりとして、それぞれの日常の営みの中に力となっています。

「たんぼぼの会の代表」として活動をされています、Cさんにパネラーになっていただきました。その「たんぼぼの会」の仲間が、この会場にも来てくれています。私が「鳥取でしゃべる」と言ったら、仲間が来てくれるかって言ったら、なかなかそうはいきません。やっぱり深く物事を考えんから来られるんですね。(笑い)やっぱり「こういうつながりっていうのは良いなあ」と思います。そういう関係性を作っていく。そんな取り組みをしておるCさんから、自己紹介を兼ねて話をさせていただきます。どうぞ。では拍手をお願いします。(拍手)

《パネラー C》

たんぼぼの会の立ち上げ

こんにちは、皆さん。鳥取から来させていただきました。Cと言います。ご紹介いただきましたように、今、「たんぼぼの会」という自主学習グループのお世話をしています。6年になりました。

今日、お話しをさせていただこうと思っていますのは、この「たんぼぼの会」としていろいろやっていることを含めながら、私になぜ、今こうして「同和教育」を一生懸命続けながら、それが自分の生活の一部になっているのかということです。そのことの意味を皆さんに少しでもお伝えできればなあと思いながら、鳥取から来させていただきました。ささやかな活動ですけれども、今日、何かひとつでも皆様の心に残ることがあればと思います。

まず、「たんぼぼの会の代表」という形で参加させていただきました。私たち「たんぼぼの会」は、小学校の先生・中学校の先生・高校の先生・そしてPTAで同和教育に関わってきた者、そして、周辺の町の教育委員会の人権教育推進委員と、本当に幅の広いメンバーが集まっています。立場ではなく、自分の思いで「何かを見つけたい」「仲間を見つけたい」「つながっていききたい」「いろんなことを感じていきたい」、そういう思いの中で集まってきたメンバーです。

最初に集まった時には、本当に10名足らずでした。その仲間が、「この人も一緒に連れて行きたい」「この

人にも感じて欲しい」と言って連れて来ながら、今、メンバーが30何名になりました。

そういう中で、2ヶ月に1回定例会を持ちながら、「来れるときで良いから」という形の、本当にフリーな形の学習会を持っています。いつも参加してくれるメンバーは、入れ替わり立ち代わりしながら8名前後です。

けれども、そのつながりは、その定例会のときに来てくださるだけではなくて、日常の中で、いろいろ出かけて行ったり、いろいろな場面で出会うことによって、いろいろなものを感じ合ったり、支え合ったり、そして、お互いの力になりあえる関係になっている。そのことを誇りに思いながらお世話をさせていただいています。

同和教育との出会い ～向き合い方を変えたお母さんの一言～

とは言うものの、私自身が最初からこういう形で、本当に自分の生活の一部として、同和教育を続けてこられたわけではありませんでした。

私は、PTAとして同和教育と関りだしてから、今16年目になります。出会い始めた頃には、やはり「硬い」「暗い」「難しい」。なぜ、こんなに難しい言葉ばかりが羅列するこういうあいさつがあるんだろう。こういう語りがあるんだろう。わけがわからない。そこから始まった同和教育でした。

でも、「本当に、他人のことを自分のこととして本気になっている」また、「人として本当に温かい」そういう人たちとの出会いがたくさんあり、いろんなことを感じさせてもらいました。私たちは、こういう活動を続けていく時に、「最初にどんな出会いを持てたか」ということで、それから先の関わりが変わってくるのではないかと思っています。私は、「他人のことに本気になり合える」「輝いている」そういう、本当に温かい人たちとの出会いの中で、いろんなことを学ばせていただきました。

そして、いろんな研修に出かけ、自分なりに精一杯の活動を続けてきて、自分の中で「自分は理解できました。私は頑張っている。そうして周りの人も、熱心な人だと認めてくれた。」そう思っていた時期に、あるお母さんの一言に出会いました。その人は、私の子どもの同級生のお母さんでした。同和地区の中にあって、いつも研修の場には出てきて、自分の思いを一生懸命に語っていました。

その彼女が、ある研修の場で、「この人は熱心な人だ。この人なら大丈夫だろう、そう思っていました。でも、学習会の場で結婚問題の話が出た時に、親戚がどうの、周りがどうのと言って、最後まで自分の気持ちは話されませんでした。ああ、この熱心な人でも結婚問題のことになると一緒なのか。そう思ったら、人が信じられなくなった。」そういう発表をされました。その発表を聞いたときに、私は「あ、自分のことだ。」とっさにそう思いました。同じ場面が私にも覚えがありました。

その時に、「この同和地区の中に、私のことをこれだけ信じてくれていた人があったんだ」というよろこびと共に、「この人を裏切っていた自分もあった」ということを感じました。そして「この人に、もう一回本当に信じてもらえる人間になりたいなあ。」そのことを強く思いました。「どうすれば本当に信じてもらえるんだろうかなあ」と考えた時に、出した答えは、「口でいくら上手なことを言っても無理だ。それだけでは絶対に信じてもらえるはずがない。一回失った信用を取り戻すためには、日々の自分の行動から見てもらうしかない。」ということです。

町内学習会(小地域懇談会)で同和地区に繰り返し参加する中で

そのことを感じた時に、私は、自分の中での同和教育との取り組みが本気になり、姿勢も大きく変わりました。そして活動を続けていく中で、同和地区の中の学習会(小地域懇談会)にも、度々出かけていくようになりました。

最初に出かけて行った時には、「こんなことを言っても信じてもらえるんだろうか」「感じてもらえるんだ

ろうか」「何をどう話せばいいんだろか」等、ちょっと固まりながら参加していた自分がありました。でも、その参加した学習会の中で、いろんな思いを返して来られたり、問うて来られたりする中で、私は、周りから「怖い」と言われながら、自分でも「特別な所」という見方をしていた。そういう地域の中で、実際に会って語り合う中で、「あ、この人たちは決して怖い人たちじゃない。本気で部落差別をなくしたいと、願っている人たちなんだ」ということに気づきました。

そして、その「怖い」と言われること、「みんなが押しかけて来る」と言われることも、周囲から聞いていました。「そのことがどういうことなんだろう」ということを、具体的に考えていった時に、私たちは、部落外の中にいて、何か困ったことがあって、自分だけでは解決できない時に、友人に「助けてくれ」と求めて行きます。親戚にも「応援してくれ」と訪ねていく時もあります。知り合いに助けを求める時があります。それが、いろんな差別の事情の中であって、同じ村の中にその人たちが集まっている時に、私たちと同じことをしていても、「部落中が集まってくる」という表現として捉えられることもあるのではないかとということも気づきました。

そして、何度も、同和地区の学習会の参加を続けていく中で、その村の人たちから、「こうして来てもらえることがうれしいんですよ。また来年も来て下さいね」とか、「人権教育推進委員をずっと続けていてくださいね」とか、いろんな言葉を聞くようになりました。そして、つながってきたいろんな仲間からも、いろんな思いを聞く中で、私は、この自分の学びと共に、ひとつわかってきたことは、「被差別部落という部落はない」という、あたりまえのことへの気づきでした。周りの人が、あそこは被差別部落だと呼んでいる所はあります。

そして私たちは、例えば歴史の勉強などを考えたときに、革製品等では、出来上がった製品は「素晴らしいなあ」と言ったり、「大切なものだ」と言ったり、大事に扱っています。けれども、なぜ、それを作っていく過程にある人は差別されるのだろうか。「これってずるいよねえ」「出来上がったものは大切だ」と言いながら、それを作る人たちを、どうして私たちは差別してきたんだろうか。そういう当たり前の「不思議」に、一つ一つ気づくことができました。自分の思いを伝えていく機会をずっと持たせていただく中で、同和地区の中に、多くの仲間ができました。その仲間達は、「いつまで私たちはこんな思いをしなければならないんだろう」と問いかけてきます。

そして、「差別の現実」や「悲惨さ」「辛さ」を訴え問いかけた「暗い同和教育」と言われたところから、視線を変えながら、「差別を乗り越えてがんばっている素晴らしい人たち」という「明るい同和教育」ということを求めてくるようになりました。けれども、「なあ、私たちいつでも素晴らしい人でないといけんか。頑張っている人でないといけんか」と問いかけてきた同和地区に暮らす仲間からの一言に、「いつも明るく頑張っている必要はないよなあ」「頑張れるときもある、頑張れないときもある。いろんなときがあって当たり前だよな」。そういう小さな当たり前にも気づいてきました。

部落解放鳥取県研究集会の特別報告から得られた真友

私の直接出会ってきた同和教育の学びは、そういう、「小さな小さな当たり前」に気づきながら、少しずつ、自分を振り返っていく学びとなりました。そして、私は、参加者3200人という鳥取県部落解放研究集会で、「部落外で頑張っているあなたの思いを伝えてほしい」という依頼を受け、「体験発表」をする機会をいただきました。その発表が終わった時に、「今話をした人とどうしても話がしたい。つながりたい。」そう言って声をかけてくれた仲間と出会い、その出会いが「たんぼぼの会」の立ち上げにもつながってきました。

その仲間の、周辺への人間関係の広がりと共に、今の仲間の輪の広がりも出てきました。そして、この実践を続けていきながら、いろいろな仲間の想いを、自分の想いに、少しずつ引き寄せて考えられるようになった頃に、私は「不思議だなあ」と思うことができました。

それは、いろんな研修会、研究大会で「実践発表」・「体験発表」がおこなわれています。その多くは「同和地区の中であって、いろんな努力をしてきて今に至った」という発表や、「同和地区の中に嫁いでいて、いろんな差別を乗り越えて今がある」という発表の多さへの気づきです。

これって変だなあ。こんな発表ばかりで良いのかなあ。本当は、私たちのように同和地区外にいる者が、「いろんな学びをする中で、ここまで気がついてきた。」そんな、途中段階で良いから、その気づきを安心して発信していけるような、そういう仲間の輪を少しずつ広げていけるような発表があってもいいのではないのかなということを考え出しました。

私たち、いつも「同和地区の人たちの体験」に学びます。しかし、「それだけではなかなか自分のことにはなっていないのではないか」と思っています。地区外に暮らす私たちが、「私はここまで学んできた。でもやっぱりわからない。どうすれば少しでも気づいていけるのだろうか」という、途中段階でいいから想いを伝え合っていくことで、みんなが少しでも「わがこと」に置き換えながら、語り合えるようになるのではないかなと思います。

PTA活動 ～よろこびとなる活動の広がりを求めて～

それから私は、PTA活動として同和教育を続けてくる中で、委員長という立場で皆さんのお世話をする機会をいただきました。その時に私が実践してきたことは、委員の皆さんが「ああ、同推委員会に入っていてよかったなあ。」年度の終わりにそう思ってもらえる研修や委員会を、どう作っていくんだろうか。仲間のつながりをどう作っていくんだろうかということをもとに求め続けることでした。

その時に、私は、「参加型学習」を取り入れたりしながら、事前に体験学習をしてもらい、当日の「学習の進め方のマニュアル」を自分の手で作って委員さん全員に渡し、当日については、実践をしてくださる委員さんたちのフォロー体制を作ってきました。人の前で話しの苦手な人には、話せる人をペアーに組んだり、委員長、副委員長がフォローに入りました。

先生方にも、事前に職員間で体験学習を実践していただき、当日は、「PTAが主体で進める研修会」という形を取りながら、いつでもフォローをしてもらえる体制でいてくださいとお願いしながら、「PTA活動はPTAも主催者」という意識を明確にしなが、少しでも安心して当日を迎えてもらうための手立てを、精一杯に繰り返してきました。そして、講演会は、「少しでも元気の出る講演会を」と願いながら、講師選挙をしてきました。

そして、私たちが一番問題として考えたのは、当日の参加者は考えてもらえる。それでは、「参加してもらえない人にどうしていくんだろうか」となった時に、やはり「広報紙で伝えていくしかない」ということに思いを馳せながら、少しでも読んでもらえる広報紙作りとして、手書きで、上質紙で、季節により色を変え、少しでも目に留めてもらえる事をめざすと共に、おこなった研修がまだ記憶のあるうちに、タイムリーに届けるという「啓発活動」もしてきました。

「楽しみにしています。」「いつも勉強をさせていただいています。」「活字のものは他の書類と一緒にしてしまう時もあるけれど、手書きだと読まずにいられない。」そういう声に支えられながら、このPTA活動を続けていくことができました。

同和教育の学びとつながりから変わっていった自分の生き方

そして、私は看護師をしていますので、自分の身体のきつさと時間のやりくりをすれば、昼でも夜でも「研修会」、「講演会」に参加することができました。その中で、出かけて行きたい思いはいっぱいあっても、どうしても参加することのできない仲間のもとに、その研修で学んだことをレポートにし、講演記録を作り、自分の手で本気でまとめたものを、直に足を運び届けながら、「なぜ、これをあなたに届けたいのか」とい

う思いを伝えていくという活動を続けてきました。

そういうことができたのは、私のことを認めてくださる。「また待っている」と言葉を返してくださる。その「仲間の力によるところが大きい」と思っています。そして、「もっとわかりやすくまとめよう」「もっと正しく伝えよう」「この言葉の奥までわかる様な記録を作っていこう」そのことを目指すことで、「学ぶ喜び」や、「伝えられる喜び」、「わかってもらえるための工夫」というものを、自分の中に築き上げてくることができたと思っています。

私は、この記録を、より正しく、より分かりやすく、より伝えやすくするために、49歳でパソコンを独学で覚え、今、少しずつでも自分の思いを文字に打ち込める。そこまでの努力をしてきました。それには、やはり、「この人に伝えたい」「どうしてもこの思いを少しでもわかって欲しい」その思いがあったからに他なりません。

私たちは、「自分が今学んだことを誰かに伝えたい。」本気でそれを思えた時に、「無限大の可能性」を自分のものにしていくことができるのではないかなと思います。何もしないところからは何も生まれません。私たちは、小さな失敗をすることに怖さを感じないように、小さな失敗は「宝物」だと思えるようになったら、いろんなことにチャレンジしていくことができるようになります。

何かをする時に、スムーズにいつてしまったら、工夫する力は生まれません。「これでいいんだ」と流されながら日々を送ってしまいます。でも「小さい失敗」を経験していくことで、「次はどうすれば良いのかな」「失敗をしないためにはどうすれば良いのかな」と、自らを振り返ったり、「工夫する力」が生まれてくると思っています。その繰り返しの中で自分の思いを伝える力ができ、伝えたいと願う気持ちが生まれてきて、それが大きな大きなうねりとなって、社会に広がっていくのではないかと思います。その想いに必ず答えてくれる人がいる。そう信じています。

一人一人の声を出していくことで、みんながそれに応えあっていく。「啓発は難しい」と言われるけれども、こういう「日常のささやかな活動」を続けていくことこそが、大きな啓発の力になっていくのではないかなと思います。

私は、かつて自分の思いを伝えることがとてもへたくそでした。そして、人の思いを感じることもへたくそでした。いつも中心に自分がいました。他の人の心に想いを馳せること、他人の悲しみに本当に共感しながら、自然に涙が出ること、他人のよろこびを自分のよろこびとして、良かったなあと思えるようになること、これができたことが、私の16年間の「同和教育」とのつながりで見つけた最大の宝物だと思っています。そのことを伝えたいと願い、行動していく中で、今、仲間の輪がどんどん広がって、いろんな県外の方ともつながってきました。

「この学んだことを、私一人ではもったいない。」その思いが生まれました。私は、こういう研修会の時には、必ず、前から2番目中央の席に座ります。この前の席に座ることによって、語られる講師の先生の熱い思いを感じ、憤りを感じ、「どうしてもこれを伝えずにいられない」という熱を感じて、それを仲間の元へ届ける活動を続けています。

そういう、「今、自分にしかできないこと」「これなら自分にもできる」ということを、繰り返し繰り返し続けていくことこそが大事なのだと思っています。

役割の終わりの時が始まりの時 ～自分の真価はここから…～

私たち、いろんな役割を持ちながら実践していく時に、会が終わり、その任期が終わると、「やれやれ」とほっとしてしまいます。けれども、「そこが終わりではない」と、いつも関わってきた推進員さん達と語り合っています。自分達は、この自分の役割が終わった時こそが「スタート」の時だと思っています。現職で自分の役割として学んできた時は、それは基礎の時間であり、役割が終わった後に、「そこから自分はどう

していくんだ」ということを、本当に日常の中で実践していった時、「あの人の言ったことは本当だった」と初めて信じてもらえるのではないかと思っています。

自分が本気に関り、進めてきた推進委員会が、私の終わった後に、関わってくださる方々も会をスムーズに進めることができ、「やっていて良かった」と思ってもらえるように、私は、関わってきたところにはずっと関り続けていきたいと思っています。自分が培ってきたものを、少しでも伝達していきたいなあと思います。困った時に、「応援して」と声がかかってくると、それには少しでも応えていきたいと思っています。

私たち、終わった時からを「第2のスタート」として、同和教育を生涯の営みとして、よろこびとして感じてくださる人の輪が一人でも二人でも広がっていく。「ああ、やっぱり同和教育をやっていて良かったなあ。いろいろなしがらみから解き放たれていって、自分がありのままの自分で暮らしていける自分育てができて、自分が幸せになったなあ。この幸せを人に伝えずにいられるものか。」そんな仲間のつながりを作っていきたいなあと思いながら、今日、鳥取からここまで来させていただきました。私のいただいた時間が来ましたので、私のお話はここで終わらせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

会場の皆さん、Cさんは教員でもありません。行政職員でもありません。看護師さんです。PTA活動の中でいろんな出会いがあり、その仲間とのつながりの中で、それが「よろこび」となって「生きがい」となって、そして「たんぼぼの会」という自主活動を始める。私たちは今、行政の様々な研修があります。学校での取り組みがあります。いろいろに参画していく中で、その取り組みに連動しながら、これからは、やっぱり私たちの「地域での関係性」というのが、求められていると思うんです。

まだまだ、部落差別は血を吹きます。切ないものが胸に溜まっています。この後語っていただく応神中学校のD先生は、私より1年遅れて板野中学校にやって来ました。非常に勢いがありました。無鉄砲で考えなしで、(笑い)本当にしたい放題をやっているんですけど、「こんなに好き放題にできたら楽しいだろうなあ」と思いました。

そういうやり取りの中で、彼と一番最初に話したことは、「同和教育というのはおまえの家族の問題だろう」「おまえの身内の問題だろう」ということです。「子どもに差別をなくそうと偉そうに言う前に、おまえの家の中から部落差別をなくして来い」という話をしたことがあります。そんなやり取りもあるわけです。

そうしたら、学年全体としてみんなで語り合う授業で、その指導案に、親と語り合ったことをいっぱい書いています。そして、親にとことんやり込められるんです。一生懸命同和教育をやっている息子に対して、「あんた、たいがいにせえよ」「のめり込んどるのと違う」といういろいろな家族の中のマイナスの話を題材にしながら、何度かクラスの中でやり取りをする。指導案の中に、散々、親とのやり取りや切ない思いを書いたその公開授業の時に、親を連れて来るんです。普通連れて来ませんよ。私は、親を連れて来る先生も先生やけど、来る親も来る親だと思っんです。(笑い)来てくれるんです。

散々家でやり取りをしていて、それを資料にした授業に親を連れて来る。この感覚ですよ。最初の年は母親を連れて来ました。その、家でのやり取りは1年2年では解決しません。その取り組みがあって、次の年も彼が公開授業をしました。その2年目の公開授業には、父親を連れて来るんです。お父さんは最後の研究会まで残ってくれました。彼が公開授業をして、全体授業を私がやった後、研究会をしました。私はその研究会の時に、「この男は本当に考えてないな」と思ったんです。研究会まで残ってくれたお父さんに対して、「言わせてください。」と、最後にマイクを持って語った言葉が、「父ちゃん、わかってくれたか？」(笑い)すごいなあと思っんです。

結婚の話が出ましたけど、彼は、家の中で親とこういう関係を作っていますから、彼自身の結婚のとき、「好きな人ができた。結婚する」と親に報告すると何の抵抗もない。そんな関係になっていく。現実問題と

して、私たちの中に、身元調査が当たり前だったりする意識がまだまだあります。でも、そういう世界から豊かに解放されていく。

(コーディネーターのとどまることのない語りに、前のパネリストはお互いにそっと顔を見合わせ、「先生は、Dさんのお父さんが来られていること知らないのかなあ、今言えんなあ」そんなどうしようというささやきを交わすも、気づかず語りは続く)

お母さんが、まったく反対する気はない。「良かったね」と受け入れて聞くわけですね。「何処の人？」と。許しておるわけですから、認めているわけですから、私は、「何処の人？」と聞くことは良いと思うんです。「ご両親はどんな仕事をされているの？」その問いかけにも、彼は原則論を貫くんです。「何処に住んどうが何が関係あるか。親がどんな仕事をしていても関係ない。」唯一そのときに答えたのは、「結婚する相手は女の人や。」(笑い)それで通るんです。

そのD先生の結婚式の招待状。『峠』という道德の「中学生読み物資料」の中に、非常に素敵な招待状を入れているんですけど、それを見せて、「おまえもこういうセンスのある招待状を作れよ」という話をしたら真似をするんです。

作った招待状が無茶苦茶センスがないんです。(笑い)「憲法24条」が書いてあるんです。わかりますか？「憲法24条」。「両性の合意に基づいて婚姻が成立する」と書いてあるんです。「私たち二人は、憲法24条を仲人として…」このセンスのなさに感動しました。

彼自身の中に「本気」があって、その「本気」が子ども達を「本気」にしていく。地域を「本気」にしていく。応神中学校が変わっていく。応神中学校の子ども達が、今年の「徳島県人権を考える中学生集会」でどんなに輝いたか。

その取り組みを、彼は板野中学校で『峠を越えて』という実践記録を作ったように、応神中学校でも、今日、この会場の後ろに置いてあります、「われら地球人」という、訳のわからん実践記録を作っています。やっぱり何にも考えないというのは能力だと思います。(笑い)そういう仲間に、私はいっぱい力をもらいながら頑張れます。彼自身の語りを聞いてください。ここまではめ称えたら後は、よろしく。

《パネラー D》

応神中学校のDと申します。あまり他人の前に立って話すような人間ではないと、自分では思っております。今、A先生からおほめの言葉をいただいたように、私はあまり物事を深く考えていません。

この夏休み、うちのクラスの子の、部活動の四国大会決勝が、愛媛県の「砥部の運動公園」であって行ったんです。「一人で行ったら怒られるかな」と思って家族で行きました。「砥部の運動公園」の隣に動物園があるでしょう。僕らが砥部に行った時、徳島は良かったんですが、愛媛は警報が出ていたんです。直前まで動物園は閉まっていた。(テーブル上のペットボトルを開けかけ、動揺で開けられず、隣のパネリストがそっとボトルのキャップを外して渡す)

そんなことを全く知らずに、試合を観た後、砥部の動物園に入ろうとしたんですけど、この動物園っておもしろいですよ。動物園の外に狸が住んでいます。本当ですよ。動物園に入ろうとしたら狸が走っていますよ。びっくりしました。一瞬私は「動物園に入ったのかなあ」と思いました。動物園の外にもかかわらず狸が走っています。すごい動物園だなあと思いましたね。

うちの学校のことを話します。うちのクラスは、といっても学年2クラスしかありません。小さな学校なんです。うちのクラスの子が、この度卓球で徳島県で優勝して、四国中学校総合体育大会に行きました。応援に行ったんです。四国で2位になりました。全国大会にも、日帰りで応援に行きました。3週間くらい前にも、教え子がサッカーの全国大会に静岡に行きました。これも応援に行きました。静岡まで4時間で行って、4時間で帰りました。近いですよ。こんなことを言ってもなんですが、コーディネーターのA先生

には、いろんなことを話していただいたんですが、落ちを言っても良いですか？(さりげなく父親の方を間で示しながら)親父がこの会場に来ているんですよ。(会場に温かい爆笑)

《コーディネーター A》

(初めて知り、驚きと共に笑顔でDさんの父親の方を向き、)失礼しました。(笑い)

《パネラー D》

(明るい笑顔で)僕がびっくりしました。(時計を見ながら)これ、時間来ていますが、良いですか？

《コーディネーター A》

3時までいいですよ。15分間でお願いします。

《パネラー D》

アンケート用紙と自らの名前から

皆さんが後から書いて出されると思うんですけど、「人権地域フォーラムアンケート」。

このアンケート用紙の2番の質問、「参加した結果、どのように思われますか？」普通3つの項目くらいです。「1 有意義だった 2 あまり有意義ではなかった 3 有意義でなかった」ですね。

ところが、このアンケート用紙には、「2 少し有意義だった」(笑い)あまり見かけないですよ。これは。この謙虚さというかお茶目さというのが、「良いセンスしているなあ」と思いながら見ていました。

それからもう一つ、このレジュメをずっと見ていきますと、私の名前、(コーディネーターより、「ごめん、間違っていた」)ここに振り仮名が「よしなりまさし」(コーディネーターより、「ただしです。')いや、これはこれで良いんです。「ネタ」になりますから。何でも「ネタ」にしますから。名前のこだわりというのは、僕は、おそらく小さい時からあったと思うんです。というのは、「ただし」と読まれたことは本当に、生まれてからこれまでに数回しかないと思います。ほとんど「まさし」です。

中学生の時に、何で表彰されたかは覚えていませんが、全校の前で、読み上げられたのが、「よしなりせいし」(笑い)これはね、全校生徒の前で笑えませんか。そういうこともありました。

名前へのこだわりというのはずっとあったと思うんです。今日持って来て、後ろに置いています「われら地球人」という実践記録集にも載せていますが、「イルム～名前～」(私の願い)という中学校の教材があります。これは、在日コリアンの方の問題を取り上げた資料なんですけど、去年、うちの学校で、「それについて学習しよう」ということで取り組んできました。「イルム」というのは、「名前」という言葉です。

「名前」にこだわるということと、「ふるさと」にこだわるということは、どこかで重なっている部分があるような気がして取り組んできました。このことの具体的なことについてははしります。次に行きます。まだ時間ありますね、いいですか？…

関わってきた子どもたちの成長により突きつけられる問題 ～現実と向き合う子どもたちと共に～

「結婚のこと」にいきましょうか？では、「ひとごと」の部分は置いておいて、「わがこと」の部分で話します。「ひとごと」の時期があつて「わがこと」になっていく段階があるんですけども、部落差別だけではないと思うんですが、部落差別についても、他の差別についても、自分のすぐく近いところに来た時に本性を現すと思うんですよ。すぐく身近に来た時に、「背中を向ける」か、「正面から向き合うか」となるんだと思うんですよ。遠い時には、みんなが良いかっこをしますが、ごく身近に来た時に、自分は「どういう本性を出すんだろうか」というところなんですけど、教員をしていく中で、目の前の子ども達が成長していきます。

Bさんも高校生の時に初めて出会って、「すごい元気な高校生がいるなあ」と思ったんですね。「こんな若者がいれば絶対世の中が変わるだろう。もっともっと、こういう若者を小学校・中学校・高校と育てていかなければいけないのではないかなあ」と思いました。「その子の中にある良さというものをずうっと引き出していければ、若者世代が変わっていくだろう。世の中が変わっていくのではないかな」とすごく感じました。

ところが、関ってきた子ども達を見て、23～25歳位になると、やっぱり「切ない相談」に来るようになってしまうんですね。その内容は、はっきりいって聞くに堪えないんです。何って言うんですか…、自分が何でもかんでもぶち壊したくなる感覚になるんです。

例えば、中学校時代にすごくやんちゃで、めちゃくちゃ元気な子。親分肌で元気なんですけど情は厚い、そんな部落の子が、高校卒業して恋愛をした時に、ある日私の携帯電話に電話がかかってきたんですよ。それまで、その子から携帯電話なんてかかってくるのがなかったんです。「何だろう」と思いました。すると「俺、彼女ができた」と言って、現在はこんな状況だけでも反対されている。その話す声のトーンがめちゃくちゃ低いんですよ。ものすごく元気な子だったんですよ。何度かくっつかかってくるという場面もあった子です。その子が、声のトーンがぐうっと下がって、親に反対されているということを言います。相手の親から、「同和奨学金を受けていたことは絶対口にするな。自分の生まれ育ったところは絶対口にするな。それだったらうちの娘と結婚をさせてやる。」と言われました。

我々が、中学校、高校の時にずっと言ってきたことと、全く正反対のことを言われてしまうんですよ。それで本人は悩むんです。「先生が言ってきたことと、今の俺が立っている立場って違うじゃないか。どっちが本当なんだ。どうしたらいいんだ」ということを、中学時代あれだけ元気だった子が訴えてくる。こちら腹が立って、何度もやり取りをしていく場面もあります。

時間の関係でもう1件だけにしますけど、2年くらい前に相談に来たケースです。仰々しい同窓会ではなく、「ささやかな同窓会」をしていました。その時に、相談に来るわけですよ。部落の女の子が「私今、付き合っている子がいるんです」って。「結婚をしようという話はしているんだけど、相手の親は認めてくれん。今、相手の親と会おうと努力をしている最中なんだ」ということを、やっとな聞いて、その日は別れました。

その後、その子と彼氏と一緒に飲みに行こうということになって、その彼氏と会いました。B君みたいなさわやかな好青年でね、応援していたんです。応援はしましたが、彼氏に一言だけ言っていたんです。「本当に一緒にいる気がないのなら別れて」「中途半端な気持ちで付き合っているのなら別れて」「とことん付き合っていて、結婚できませんでしたではあまりにひどいから、本当に結婚をする気があるのなら応援するけど、真剣みがないのだったら今すぐ別れておいて」「それはどちらでも良いから、それであなたを恨んだりしないから」と言っていたんです。

一言一言の言葉に、「はい」「はい」と言っていました。その後に電話がかかってきました。「彼の両親に会ってくれと言うんで、私行ってみようと思う。」そう言う彼女の心臓がバクバクしているのが、携帯電話の向こうに聞こえるんですよ。彼女がすごく不安がっているのが良くわかります。「いつでも連絡ができるようにしておくから、いつでも連絡しておいで」と言いました。彼女は東京に彼の両親に会いに行き、その日の晩に僕の携帯に電話がかかってきました。「どうだったのかなあ」と思って話を聞くんですけど…。

どんな話だったかというね、まず、結婚しようかという女の子を家に呼んだ時、僕だったらですよ。僕だったら彼女を家まで迎えに行きます。迎えに行き家まで連れて帰ります。まさか、家にいて来るのを待たせません。僕だったらですよ。でも、その女の子の場合は、「うちまでおいで」と言われた。結構距離があるんですよ。彼女の家まで、1人でわからんながら探しながら行くんですけど、行ったにもかかわらず、お父さんは仕事に行っていて居ない。お母さんは農作業に行っていて居ない。おかしいでしょう。呼んでお

いてそれはないでしょう。

しばらく彼と家の中で過ごして、夕食の時にやっと家族がそろったんです。そこにもねえ、身も凍るような、大変コールドな冷たい晚餐ですよ。そこに一緒に居たわけではありません。が、彼女はそう言っていました。「すごく、自分が居るのか居ないのかわからないような、そんな扱いだっただ。」そして、相手の親から唐突に聞かれたことは、「お宅の宗教は何ですか？」聞きます？初対面で。ご存知の方もいると思いますが、宗教を聞くことで…ということですね。その後の話も、とんとん拍子には進んでいきません。全然進んでいかない。

その日は、結局、彼女は凍りついた心のままで帰ってくることになるんです。それも一人で。夜の山道です。彼女は家に帰り着いて、自分の両親に事情を説明するんです。話をしたくはない、彼氏のことも悪く言いたくない、彼氏の家のことも悪く言いたくないんだけど、彼女の両親だって心配している。どういうことになっているのかすごく知りたい。親の立場とすれば当然ですよ。聞くんです。聞かれて言わなければ仕方がないから、説明するんです。

彼女の両親は、「彼氏にうちに来るように連絡をとりなさい」と言います。「どういうことなのか」、「どういうふうにしたいのか」、「どうなっていくのか」、「どういう風にしていくなのか」ということを聞きたいからということで、その晩のうちに2度3度電話でやり取りをするけれども、彼氏は来ない。

私たち、関っている子どもがかわいいですよ。分身のようなものですから。学校ってそんなものでしょう？生徒と先生の関係だってそうでしょう。皆さんのところが、20人か30人か40人か、何人いるかわかりませんが、子どもはみんなかわいい、ですよ。どうですか。クラスの子ってみんなかわいいと思うでしょう。分身みたいなものだって思うでしょう。思いませんか？

そんな子がいったん卒業したからといって、何年か経ったからといって、そんな関係は変わりません。だから居てもたってもおられんで、彼女の家に行っただけです。お父さんお母さんを目の前にして、いろんな話をしたんです。「とりあえず私が彼に会います。どういふことかを聞きますから」と言うんですけど、お父さんもお母さんも頭にきているんですよ。頭にきているというのは表現が違います。悔しくて、悔しくて仕方がないんです。辛くって辛くって仕方がないんです。お父さんお母さんは、「だから部落外の彼氏を作るなど言ったやないか。お父さんがよく知っている人を紹介するから」と慰めるんですけど、娘にとったら慰めにもならんのです。その人を好きだから。

後日、私も会うんですけど、「はい」「はい」と威勢はいいんです。ところがその日別れて、すぐメールが送られてきたのは、「お世話になりました。ありがとうございました。」それだけです。そんな残酷な話があります？

これは今の出来事ですよ。10年20年30年前の話ではないですよ。今ですから。そのことを彼女や彼女の両親に伝えたら、彼女は、「あの人はそんな人だと思わなかった。もうあきらめもつく」と言うんですけど、その時に出てきた言葉は、「次に恋愛するのが怖い。」それはそうですよ。聞いている僕も切ないです。どうしようかと思いました。

この日本の人口の中で、そのケースだけだったら、良くはないですけど、納得をするかもしれません。もう、時間がないので言いませんけども、こういうケースが今まで何件あったことやら。今のことですよ。そんな子を目の前にして、私ね、「ひとごと」とか言えません。言えませんよ、そんな子ども達を前にして。『どうにかして守ってやろう』と思います。守りきれんですけど、でも、関り続けて行くしかないですから、関り続けて行きますけど、「わがこと」にしかならないと仕方がない。というふうな内容のことを、後日鳴門市が発行される、今日の「人権地域フォーラム」の広報の原稿としてA先生に渡してありますので、ご覧になってください。とりあえず時間が来ましたので以上で終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

重く、重く、心に突き刺さった方もおられると思います。自分の子どもや孫の思いと重なって、涙があふれた方もおられると思います。だからこそ、私たちは歩き続けていかなければならないんです。3人の語り、会場の皆さんの中にどう届いたでしょうか。

今から15分休憩を取らせてもらいます。近くの席の方、同じ職場の方等でいろんな話をしながら、15分間を過ごしていただきたいと思います。前にはちょっと空席もあるんですが、狭いですから、ちょっと隣の人に「4時半まで頑張りましょうね」って声を掛け合ってください。この時間をみんなで思いっきり大事にしましょう。そして私たちの営みが、私たちの力がつながっていく、そんな時間になればと思います。

前半終了

=意見交換=

《コーディネーター A》

あつという間に1時間半が経過しました。非常に重い現実が最後に語られました。私も、Dさんが最後に話してくれた2人と時間を共有したことがあります。昨年5月6月でした。女の子はあまりにもけなげです。切なくてたまらなかったです。

今の休憩の時に、同じような思いをメッセージとして届けていただいた方があります。「現実に学ぶ」ということをずっと大事にしながら、この現実に自分を重ねながら、「何とかしていきたい」という私たちの関係もあります。しかし、「いつまでこんなことを言っているんだ」という、あまりにもスッと流れていく無関心な現実もあります。

どうでしょうか。私たちの中にぐっときた思い。今日、「でもこんな思いもある」という思い、そんないろんな思いをこの会場の皆さんと話し合って、確かなものをつかみ合う時間になればと思います。昨年も最初は少し重かったんですけど、後半は收拾がつかみませんでした。是非皆さんのたくさんの声が会場に広がって、「ここに来て良かった」という場面を、皆さんお一人お一人の語りを通して作っていったらと思います。3人のメッセージを受けて、いろんな思いを語り合えたら…。

最初の口火を誰か切ってくれますか？マイクは、口に近づけて持っていただいたら、後ろにも聞こえるそうですから。(手の挙がった女性に)はい、お願いします。

《フロア K》

こんにちは。今日、パネラーとして真ん中に座っておられます、Cさんと同じ「たんぼぼの会」のメンバーです。朝、鳥取県の倉吉を出発してこちらへ参りました。隣に座っている2人も、同じ「たんぼぼの会」のメンバーです。

今日、Cさんが話されたことは、本当に日常の実践そのままです。今日もここでカセットテープが回っているんですけど、Cさんがいろんな会のお話をテープに録音して、テープ起しをして、パソコンで打っていつも配ってくださいます。だから、今日も、話をされたBさんも、Dさんも、A先生も、会うのは初めての方もありますが、会わなくても、その記録を読むとその時の様子が目に浮かぶようで、前に座っておられる方々に対して、他人とは思えないというか、すごく親しみを感じてしまいます。

それから、これは自分のことなんですけども、今年職場を変わりまして、なかなか今自分の思いが出せないで居ます。でも、今日のいろいろな話を聞きながら、やっぱり、言って行かないと変わらない。「何もしないところからは、何も始まらない」という話があったので、「自分の1歩を踏み出さなければいけないな」と改めて思わせてもらった時間です。「今日、鳥取県から来させていただいて本当に良かったなあ」と思います。

(ニコニコと)「今日何人くらい来られるのかなあ」と思ったんですけど、会場いっぱいの人でびっくりしました。この後もたくさんのいろんなお話が聞けるんじゃないかと楽しみにしております。後になると收拾がつかなくなると言われたので、最初に話しました。失礼しました。

《コーディネーター》

ありがとうございました。会場いっぱいに皆さんの声を響かせましょう。いきましょう。はい、どうぞ。

《フロア 男性》

一番最初のBさんの話ですが、学校で、同和問題等の勉強するということなんですが、私はすでに60歳を過ぎております。私が小学校、中学校を通じて、そういう経験は全くなかったですね。

それで、会社に入って「総務関係」をやっておりますと、いろいろな「同和問題、人権問題のセミナー」とか、「研修会」があるじゃないですか。「聴傾しに行く」という形で参加しておりました。

しかし、私の娘が小学校6年生のときに人権劇をやりました。毎年、鳴門市人権教育推進協議会では、人権コンサートというものもあるんですが、ちょうどその時に、人権劇をご指導いただいたのが古林教育長さんです。子どもがやるのは本当に純粹なんです。我々が考えているような、同和問題とかいう問題は抜きにして、何かフワツとした子どもの気持ちなどから、改めて取り組んだような次第です。

その後、私共もたくさんの勉強もしまして、現在、鳴門市人権教育推進協議会の企業部会の副会長を務めさせていただいております。なかなか副会長を変わってくれませんので、もうそろそろ引退したいと思えますが…。一つ、今後ともご協力をよろしくお願いします。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。語っていただく表情がやっぱり素敵です。またその語りを一生懸命聞いていただく会場の皆さんのまなざしに力をもらいます。「『ひとごと』から『わがこと』へ」、このメッセージを受けて、私の中に何かが始まった。その何かを伝えていく。その伝えるという行為を通して、行動を通して、私たちの感性を磨いていく。そんな時間をつくりたいと思います。お二人に続いていきましょう。

《フロア M》

Mと言います。前のB君と同じ山川町から来ました。一番いいS席で座らせてもらって、「これは何かを返していきたいなあ」と思って、前の方から話をさせていただきます。

私は小学校の教員なんですが、私の学校で、学習会の「意義指導」ができない私でした。その時、私は、学習会が被差別部落の子ども達の立場宣言につながると思い、子ども達が、「先生、学習会を何処でしよるん？」と言った時に、その場所が言えない。また「どうして学習会に行きよるのか」ということが子ども達に話ができない。そういう教員でした。もちろん、同じ職場の仲間達も同じような思いでした。そういう中で、出会ったのがB君です。一時同じ学校で勤めておりました。その時に、彼は、「先生、こんなのはスツと言ってよ。」と言いました。

子どもが「何処で学習会をしているのか」ということを聞いた時に、教師が言葉に詰まるようでは、教師自身が子どもに差別意識を刷り込んでいきよると一緒だ。そこに差別があるんだ。それをスツと言っていける教師と子どもの関係、それを言うことによって、その時に、誰が責任をとるんかと問われた時に、自分がよう責任を取らん。そういう逃げがありました。

しかし、B君はその時に、「僕が責任を取る。」そういうふうに戻してくれました。「僕は一生この問題と関っていく。だから僕は責任が取れる。」私はその彼の言葉を聞いて、そんな関り方のできていなかった自

分が私にはあったし、そんな、彼のような言葉が言える、また、心を言葉にして言える、そんな先生になりたいなあと思いました。しかし、そんな中でやっぱり「ひとごと」になったり、また「わがこと」になったりしていることが、まだまだ今あります。そんな自分があるので、今日、皆さんの前で言うことによって、「わがこと」に引き寄せていける、そんな自分になっていきたいなあと思っております。

私自身はいろんなことで悩んでいることがあるんですが、今は、まだそのことについては具体的にお話することができません。ずっと子育てをする中で、一番上の息子のことで悩んでいたんですが、その息子が、「自分のことを言われるのはかまわんが、母さんのことをそんなに言うのは許せん」って言うてくれました。3日前のことなんですが、息子のその言葉を聞いて、「息子とちょっとだけつながりあえたなあ」と思いました。そのちょっとだけが、どんどん、どんどん、大きくなってきているんですが、「本当に親子でよかったなあ」と思っている最中です。以上です。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。職場においても、学校においても、家庭においても、安心して自分のうちにあるものが伝えることができる。それを聞いてくれる。返してくれる。そんなやり取りの中で、自分の語りによって自分が癒される。自分につながっている、そばにおる一人一人が癒されていく。そんな私たちの行動につながって行く時間にしたいと思います。どうでしょうか…。はい、お願いします。

《フロア 男性》

今日、Bさんからは、差別の実態の中から変わっていかれたその過程、D先生からは、部落差別の実態、C先生のその語りの中で、先生の言葉の中に「被差別部落はないんだ」と、「周りの人が被差別部落を作っているんだ」ということ。これは私も非常に胸を打たれましたし、「些細な失敗は宝物なんだ。」という言葉。

私たち北島町も、「地区別懇談会」がもう、30年近く続いてきておりますし、今年も近いうちから「地区別懇談会」を始めなければなりません。今日出会わせていただいた先生方の、ありがたいお言葉を核にして、やっていきたいなあと思います。

本日のテーマに掲げていただいております、「ひとごと」から「わがこと」へは、それこそ非常に難しい問題でございます。「地区別懇談会」は、地区へ参る時は私も必ず参加しておったんでございますが、やはり、「誰のためにこれをやっているのかなあ」と迷っていた時期もございます。

また今度、地区懇談会等に入りましても、皆さん方といろいろ啓発方法などを考えたり、問題点を話し合ったりしておるうちに、段々と、「わがこと」へ近くなりつつあるところではないかと感じているところがございます。やはり、前にも掲げてありますように、「自分を見つめながら、お互いに語り合い、人と人との輪を作りながら進めていったらどうかなあ。」今、そんな思いをしております。「マンネリ化をしておるのではないかなあ」というこんな不安を持っておるわけですが、1年1年反省をしながら、「今年はどうしたらいいだろうか」こんな気持ちで、身体に鞭打ちながら勤めさせていただいている次第でございます。

どうか、他の地区で、今取り組んでいただいているところで、「私の所はこういうふうに行っているのだ」ということを教えていただいたら、いろいろ私も役立てられるのではないかと思います。

私共の、北島町人権教育推進協議会の者も、10名近く参っておりますので、もう1回一緒に練って懇談会の実践化に進めていきたいと思っております。

《コーディネーター A》

ありがとうございます。前の3人のパネラーがまたいろんな思いを返してくれると思います。

《フロア F》

A先生からお招きいただきまして、オリーブの島、小豆島から来させていただきました。壺井 栄の小説「二十四の瞳」とかで有名な所です。前の先生方の話を聞いていまして、いろいろなことを自分自身も考えたり、D先生の言っていた「何もかもぶち壊したくなる気持ち」とか、「切ない気持ち」とか本当に、いつもそういう気持ちを感じるなあと思いつつながら、聞かせていただきました。

昨日、9月1日なんですけど、ずっと学校に来れなかった子が、いろんな思いの中で、「やっぱり学校へ来なあかん」と目覚めて学校に来てくれました。髪の毛の色が変わっているんですけど、「俺、もう1回頭を丸めて頑張る。やっぱり高校に行きたいし。」そう言ってくれました。逆に、部活にすごく頑張っていたんですけど、「香川県中学校総合体育大会」が終わりまして、ほんの何週間かの間に揺れて荒れた子どももおります。

そういういろんな思いを持ちながら、この会場に来させてもらいました。いろいろと子ども達と話し合う中で、一緒に考えたりしているわけなんですけど、その子たちが進学したり就職したりしていく中で、進学しても、その学校で合わなかったり、自分の思いを上手く伝えられなくて、途中で止めてしまったり。そんな子ども達と話をしていくんですけど、なかなか上手く語れなくて、「切ないなあ」と思ったり、「何でかなあ」と思いつつながら毎日を過ごしています。

この、「人権教育の担当」を何年かやっていると、「先生、頑張っているねえ」と言われることがあります。今日は仲間と来ていますので孤独ではないんですが、「頑張っているねえ」と言われると、逆にすごく孤独になったりします。

今日は話を聞いて、「担当だから頑張っているのかなあ」「教師だから頑張っているのかなあ」「本当に一人の人間としての行動として考えているのかなあ」と、いろんな思いが自分の中にいっぱい出てきました。「もう1回、自分の中を見つめなおしてみようかなあ」という気持ちになってきました。また、いろんな皆さんの話を聞いてしっかり考えたいと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

はい、ありがとうございます。やっぱりこの会はいいです。いろんな年代の人からいっぱい意見が出てきます。一生懸命思いにつなげていきたいと思います。いきましょう。

《フロア 男性》

鳴門に住んでいるんですけど、自分の小学校の時などをBさんと比べたら、地域の人と、保護者、学校の連携が取れていて、「学習会」にもずっと通っていて、先生などにも恵まれてきたなあと思います。保護者の考えも、「学習会に行け」というものでした。僕の2歳くらい下からは、地域行事などがあつたら、「行きたかったら行け。行きたくなかったら行かなくていい」という考えになってきたんですけど、それまでは、地域行事にしても、親がどづいてでも行かせていた時代があつたんですけど、僕らの頃から変わってきました。

同級生でも、中学までは「学習会」に行っていた子が、高校になったら来んようになったという子もすごく増えてきました。僕は、高校でも学習会の活動はしていたんですけど、でもなかなか参加もできなくて、悔しい思いの中で、地域の活動には出て行ってました。

なぜ、僕が地域の活動に出て行くようになったかという、D先生が板野中学校にいた頃の、第2回くらいの「徳島県人権を考える中学生集会」に参加したことからです。こういう会に参加していると、いろんな意見が聞けるし、その頃、僕は「同和問題」というのは嫌いだったんですけど、部落差別をなくすために話すことは好きでした。しゃべっていて、自分の思いが伝わらないこともありました。それは、学力的なものもあつたんですけど、自分でもちゃんとできていなかった時もありましたし、地元の友だちに聞きに行った

時もあります。

今、僕の頭の中がまとまっていないんですけど、今も、「出会い」のこと等話に出ていたんですが、2年前の全同教でしたか、僕も、そこで出会いのことについて話をさせてもらいました。「良い出会い」「悪い出会い」というのはあるかもしれんけど、それをどうして行くのかは、自分自身であるということ。それをやっぱり見つめていくべきではないかと思いました。

今現在ある差別の話も、D先生がしてくれたんですけど、僕も、小学生、中学生の「学習会」に、青年の会の担当として関わっているんです。その中で、やっぱり、「部落に生まれた」という立場への自覚をしてもらうために関わらせてもらっているんですけど、最近、できていないということを思います。昔に比べて甘くなったというか、子どもが「学習会に行きたくない」と言えば「行かんでもええ」という状況があって、学習会の関わりもきつところもあるんです。

僕は、自分が「生活の一部」として活動してきたことを、子ども達に教えていました。その中でも、今の自分の生活で、ちゃんとできていない部分がたくさんあって、今年の『徳島県人権を考える中学生集会』の中で、『同和問題』を自分の生活の一部として考えてきた。みんなも考えて欲しい」ということを伝えてきたんですが、ずっと一緒に活動してきた先輩に、「あんたは、『生活の一部』と言うんだったら、もっと生活を見直して、ちゃんとしていかなくては」という意見をもらいました。「正しい知識を持つことは大切だけれど、『部落』『部落』『差別』『差別』と言うからなくなならない」と言う子ども達もいます。この子ども達には、「別に関係ない。同じ人間だ」という考えと、「いまさら言わなくても良い。そっとしておいて欲しい。そしたら部落もなくなる」という子もいます。

最近の子どもには、「気にしないで、そのまま言わずにいれば良い」という子と、「差別的な気持ちは持っている」という子もいます。これから僕はどうして行ったらいいのかなあと考えています。

《コーディネーター A》

ありがとうございます。どうでしょうか。今、この会場の中では同和問題を普通に語ります。部落問題を当たり前のように語っています。でも、私たちの家庭で、また、親戚の集まったところで、私たちの職場で、また、親しい友人にそのことを告げた時に、サーッと流されてしまう、なかなか共感し合えない現実があります。日常とこの場がつながって行かないのです。だから、考えれば考えるほど辛くなっていく現実があるんです。だからこそ、やっぱり、豊かに語っていける、いろんな思いを受け止めながら自分自身を伝えていける、そんな力をつけていきたいと思います。

そんな思いに揺れている人がいっぱい集まったこういうところで、また、行政の中で、一人偶然ここに来た人もあるかもわかりません。いろんな役割で初めてここに来たという人もあるかもわかりません。ずっと話を聞いているだけだと思っていたら、マイクが回ってくる雰囲気には圧倒されている人もあるかもわかりません。

でも、参加の仕方はそれぞれですけど、そこで感じた思いは、初めて参加した人は初めてなりに、自分のことばで何かを伝えていくんです。昨年参加した人は、昨年のことと重ねながら自分を、こういう場に出てきた思いを、それぞれの日常を通していろんな思いを伝えていく。そういう「一人一人の言葉」が関係を作っていくんです。歩かなければ道はできんのです。歩かなければつながりはできんのです。限られた時間です。しゃべりたくてたまらないのが前に3人並んでいます。後何人かの人に意見をいただきたいと思います。

前ばかりになっていますので、後ろの方で少し意見をいただきたいと思います。今日の会に参加してこんなことを感じました、こんなことを思いましたという一言、二言で結構ですから、意見をいただきたいと思います。行きましょう。

《フロア M》

今日、愛媛県の愛南町から来ました。今日のテーマのサブタイトル、「自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習」というのがありますが、最近、遅まきに「A先生、Bさん、Cさん、D先生」、こういう顔ぶれで人権フォーラムがあるということを知り、是非参加させてもらおうと思って今日来ました。

タイトルが『ひとごと』から『わがこと』へ」ということなんですけど、私も同和地区で生まれ、同和地区で育って、同和地区で生活をしながら、子育てをしております。D先生の、最後の結婚差別の話を知ると、どうしても不安になります。これをしゃべる場合、自分のことをしゃべらなければいけないんですけど、結婚して23年、「同和地区だから」ということで、相手の親から結婚を断られ、駆け落ち同然で一緒になりました。その時に、私の父親に話をした時に、「おまえもか」というような言葉を返してくれました。

その当時、父親は解放運動の愛媛県の支部の役員として頑張っておりました。その父親から、「おまえもか」という言葉が出て、そのことをあまり深く考えていなかったんですが、自分がこうして仕事という関係もありまして、同和問題学習あるいは差別解消ということに関して21年になります。その中で、自分の子どもがもうすぐ20歳を迎えようとしています。本当に近い将来、「自分の子どもが結婚をする」という頃になってきました。今になって、やっと、父親が言った一言、「おまえもか」ということがわかるようになってきました。

今、現実に差別があって、その「差別をなくして行こう」と自分自身頑張っているつもりです。それをよく考えたら、社会一般の「差別を無くす」というおおざっぱなものではなく、自分も同和地区ということで結婚を反対され、いざ、自分の子どもも同和地区ということで反対されるかもわからない。そういう現実を目の前にして、もし、自分の子どもが同和地区だからということで反対された時、父親と同じような一言を息子に対して、「おまえもか」と発するかもしれないという現実があります。そのことを思うと、本当にひとごとではない、差別が自分の家庭の中にも見えている状況があります。同和地区の父親として、子どもを持つ1人の父親として、「そこを何とかしたいなあ」ということで活動をしています。

こういう現実がまだまだ目の前にあるということをしごく心配します。それを無くしていくために頑張りたいんですけども、なかなか前に進まない現状の中で、先ほどのD先生の話聞きながら、もう一回、現実と重ねながら考えていました。最近考えることなんですけど、人権のことにに関して、もっと真剣に考えて欲しいなあと思います。まとまりませんが、そういう1人の父親の心配事です。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。はい、お願いします。

《フロア S》

徳島文理大学に通っています。自分は鳥取の出身なので、今日は鳥取の仲間がいっぱい参加してくれているので、ちょっと心強いんですけど、A先生に誘われてここに来ました。

私も、生まれたのも同和地区だし、育ったのも同和地区です。小学校・中学校・高校と勉強して来ました。中学校や高校の同和問題の授業では、性格上負けず嫌いなので、自分のことも、同和地区というの、何の抵抗もなくさらっと言えるし、授業中に納得のいかないことを言う生徒がいたら、「ちょっと待って！」と食いかかっていくようなところもあったんです。けど、大学に来てから、一気に弱気になるというか、徳島に来て、まだ誰にも「自分が地区出身である」ということを言っていない。

今、3年生なんですけど、この年齢になると恋愛の話もします。結婚する友だちもぼちぼち出てきました。D先生の話してくれたことなどを聞いていると、怖いし、切ないし、前よりもっと身近に感じるというか…。そういう、同年代の結婚や見合いの話を知るのはすごく怖いです…。

今付き合っている彼氏に自分のことを言いました。今付き合っているのは徳島の人なんですけど、こっちに来て知り合った人で、徳島でその人がどんな勉強をしてきたかもわからないし、徳島がどれだけやっているかもわからないし、そういうことも怖いし…。無理に言うこともないと思って、普段考えることもないし、言わなかったんです。

でも、夏休みに入った頃からすごく言いたくてたまらなくなって、今年の「徳島県人権を考える中学生集会」に私も参加したんですが、彼氏に遊ぼうと言われてたけれど、この中学生集会に参加したくて、私は、「予定がある」と言った時に「何がある」と言われて黙っているのは嫌なんです。8月に入った頃には、「徳島県人権を考える中学生集会」に行こうと思っていたので、彼氏にそのことを言ったんです。彼氏が今までどんな勉強をしてきたかわからないし、どう思うかもわからないけど、やっぱり、やっぱり何でもない引き返せる状況ではなくなって、自分を言わなくてはいけない状況になっているけど、「私ね…」の先が全然言えなくて…。

でも…彼氏も、私が何かを言おうとしているのがわかっているから、ずっと黙って聞いてくれるんですけど…、「私が…」って言うその先が…本当に言えなくて…。見守って聞いてくれたので、「私は同和地区出身なんです」ということを言いました。そしたら、彼氏も「わかった。」と言いました。その後、ずっと黙っていたんですけど、自分が、中学校や高校の時も勉強してきたという話をしてくれて…、「中学校や高校の友だちにも同和地区出身の子はおるし、他の学校はどんな勉強をしているか知らんけど、自分は結構勉強してきたほうだと思う」と言ってくれて…。

でも…、「今はもう差別とかかってないんじゃないの？」っていう話にもなって、私は、同和地区出身の友だちがいっぱいるし、実際に差別のあることをいっぱい知っているから、そのことを言ったんです。

「もし…、私があなたと結婚することになったら、あなたの親が嫌がるかもしれない」って言いました。まだ結婚の話などは出ていないんですけど、考えたこともないんですけど…。でも…、「反対するかもしれない」という話をしたら、「親とそういう話をしたことがないから、親がどういう反応をするかはわからん」と言われました。…、でも…、「自分はそんなことで今までと違う態度を取ったりしない」と言ってくれて、「でも、2人の溝を作りたくないから、はっきり言うけど、同和地区出身だということを聞いた時、すごいびっくりした」と言っていて…、『立場宣言』とか受けたのは初めてだから、本当にびっくりした」と、何度も何度も「びっくりした」と言って…。私が、「徳島県人権を考える中学生集会が来週のいついつあるから行って来る」と言うと、「わかった。頑張ってきて」って言ってくれました。

私は、こういう活動は好きだし、止めるつもりはないし、これからもずっと参加するという話をしたら、これまでに友だちなどから「頑張ってきてね」と言われると、なんだかひとごとみたいな感じがしていたんですが、彼氏は、私が学習会や、いろんな会に参加する時に、一緒に参加するのは今すぐは無理だけど、「一緒に頑張ろうね」と言ってくれて、「一緒に」と言ってくれたのは、彼氏が初めてだったんですよ…。それがすごくうれしくて、「言ってよかった」と思いました。今日、ここへ来るのも言って来ています。

本当は、今日学校があったんですけど、サボって来たんですけど、「明日学校があるんじゃないの？」と言われて、「サボって行く」と言ったら、笑って聞いてくれました。「いつか、その人をA先生に紹介できたら」と思います。(拍手)

《コーディネーター A》

どう響いたでしょうか。一人一人の語りがまさに一人一人を癒していきます。その語りの中に、人と人との「つながり」があります。その「つながり」を、かみしめかみしめしながら、私たちの中に生き抜く力が湧いてきます。

時間が来ました。最後は、前の3人のパネラーに精一杯の思いを語ってもらって、2005年度の「人権地域

フォーラム」を閉めたいと思います。語られた切ない現実、切ない言葉、精一杯の語りを私たちの心に刻んで、私たちの中に、どんなに厳しい現実にも直面しようが、歩き続けていく力量をきっちり育てていきたい。私たちにつながる確かなものを一人一人が発信していく。豊かなものにしていく。そんな私たちのつながりを作っていきたいと思います。最後にBさんが歌いますので、Dさんの方からお願いします。

《パネラー D》

しゃべりにくいですね。さっき、20分のしゃべりの中で、不安感をあおるようなことを言ったのかなあと、今、反省をしています。現実はそのなんですが、私は教員ですが、じゃあ、不安感をあおるようなことをしていないのかと言うと、やっぱりしているんですね。

「部落差別の現実」として、例えば道德の時間、総合学習の時間を通じて、子ども達に向き合う材料を提供したり、そのことについて学び合いをしていき、語り合いをしていき、子ども達が「どういう生き方をしていくか」ということを、自分達の中に問い返しをしていくことだと思っんですよ。そうなってくると、厳しい現実も出さないわけにはいかない。だから、不安感をあおることになっているのかもしれないんですが、でも、そこを乗り越えていきたい。そういう取り組みをしていきたいと思っんです。

さっき、フロアから、「僕らは学校の場ではやっているけど、友だちと話をしているか」「家族との話をしているか」ということを言われたと思っんですけど、部落問題の話をあえて出すということは、あまりないと思っんですが、たまたま話が出たときに、僕は高校の時の友だちに話をしたことがあったんですが、さっきおっしゃられていたように、「言わなければなくなるんじゃないか。取り立てて言うから残るんじゃないか。だから俺は、やらないほうが、言わないほうが良いと思う。」ということを行いました。

僕は、それに真っ向から反対して、これをどうすり合わせていくかという話ですが、話の相手の彼とは、高校の時からのすごい親友なんです。周りに何人かいましたけど、周りの人間はどうなるかを気にしているんですよ。「この2人は仲たがいをしている。2人の関係はどうなっていくんだろう」と思っているんです。そういうつもりは全くない。では、2人の間で一つだけ共通点を見つけるならば、「手法が違って、部落差別を初めとする差別がいかんということは、それは共通するよな」という話になりました。「それは共通する。そうだな、それでいいんじゃないか。手法は違うかもわからないけど、攻める向きは違うかもわからんけど、とりあえずその1点で、今、お互いに手を取り合おうよ。そこからスタートしようよ」という話をした場面がありました。

家族との話をしていきますと、これはとんでもなく時間がかかりますので置いておきますけども、来年、またこのシンポジウムはおこなわれるのでしょうか。(笑い)おこなわれるですか。皆さん、また来たいと思います？そういうシンポジウムになっていくべきなのかなと思っんですよ。

これは何処の町も、市も一緒だと思いますが、誰もが「行ってみたいな」と思えるようなシンポジウム、今日もそうだと思うし、シンポジウムが終わった後、「よかった」とアンケートに書いてもらえたらと思います。以上です。

《パネリスト C》

私から最後にお伝えしたいことは、先ほど会場の中ほどの方から、「人権教育推進協議会の取り組みをしています。これから小地域懇談会に向けてどういふ啓発をすればいいのだろうか」というお話がありました。

そのことに少しだけお答えできるかなと思っんですけど、私は、地域の中で研修を組む時に、「正しいことをきちんと学ぶことはもちろん大切だ。けれど、そのきちんと正しいことを学んだことを、みんなに伝え合っていける力をつけるためにどうするんだろう」ということを考えた時に、先ずは、たまには「お互いの良い」ところを見つけあっていこう。「お互いが認め合える関係」を作っていこう。「ここなら自分の思い

が伝えられる」という場を作っていこう。そういう「心の土壌」を耕せたときに、自分の本当の心が語っていけるのではないかなあと考えています。

そして、私たち大人は子どもにいろいろなことを言います。でも、言っている私たちは実際にできているかなということを具体的に振り返ったり、「差別はいけない、なくして行こう」と語ります。でも、実際に差別っていったい何だろう。何をどう行動していけばなくなっていくんだろう。そのことを具体的な研修を考えていくところで、1歩1歩自分のこととして、お互いが語り合えるような場ができていくのではないかと思います。

参加型学習、人権劇、いろいろな思いの語れる場作り、具体的などころをお話しかけると時間がたくさん要りますけれど、やはり自分の地域の中で、「今何が問題か」ということを、本当に振り返りながら、その自分の地域に見合った問題点に沿った「具体的な研修」を作っていくことで、みんなの問題として、考えていけるようになるのではないかと考えています。

具体的なお答えにはなりませんけれど、でも、そういうことを目指して行くことで、一つでも研修の場が実りあるものになるのではないかと思います。

近くの同じような立場のいろんな方と、自分の所はどうしている、自分の所はこんなところが困っているということを、語り合っていくところから、自分の方向性も見えてくるのではないかなと思います。(拍手)

《パネリスト B》

最後に歌を歌います、Bです。(笑い)というか、いろいろ話したいことはあるんですが、時間がだいぶ迫っております。

それで、僕は今、止揚の会の事務局をやらせてもらっているんですけど、その、止揚の会の名前を付けてくださった佐藤文彦先生が、私たちに残してくれた言葉があります。「夜が終わるから太陽が昇るのではない。太陽が昇るから夜が終わるのだ。君達はその太陽になりなさい。」そう、言葉を残してくれました。解放令が出て140年経ちます。その頃生きていた人はもうすでに死んでいます。放っというてなくなるのであれば、もうなくなっています。人間の心は重たいです。そんなに放っておいてなくなるのなら、僕はこんな活動はしていません。そう、僕は言いたいです。

僕は高校3年生の時に、吉野川市山川町に高校生友の会で活動している『七草の会』という会があります。そこで作った歌があるんですが、「ぬくもりを感じて」という歌を、最後に歌いたいと思います。毎週土曜日の夜7時から、八坂会館というところで「七草の会」をおこなっていました。

僕たちの高校生友の会には、20人くらい来てくれていたんですけど、半分くらいは地区外の子です。2つ下の地区外のある女の子が、「今日、友の会に行ってくるわなあ。八坂会館に行ってくるわなあ」と言ったら、「あんなところは部落の子が行くところだから、あんたは行かんでええ。」とお母さんから言われます。その時、人権意識の高い女の子は毎回喧嘩です。「お母さんみたいな差別している人がいるから、いつまでたっても差別がなくならないんだ」と答えます。友の会に来たら、いつも不機嫌です。「今日もお母さんと喧嘩した。」と。

その彼女が、半年位経って言いました。「私も部落に生まれたかった。」って。「変なことを言うなあ」と思って、「何で?」と聞いたんです。「他人の痛みがわかるから。」そう言いました。「変なことを言うなあ」と思ったんです。部落の人でも、人の痛みがわかる人もおるし、人の痛みがわからん人もおる。ええ人もおるし、悪い人もおる。部落外でも、人の痛みがわかる人もおる。人の痛みがわからん人もおる。ええ人もおるし悪い人もおる。何より、その彼女は、人の痛みがわかるから僕らの友の会に参加してくれているんですよ。でも、僕は、その時あまり言えませんでした。

彼女が2年間悩んで、自分で答えを見つけてきました。ある日、友の会に行ったら、すごい笑顔なんです。

「どうしたん、何かええことがあったん？」と聞いたら「聞いて、今日、友の会に行ってくるわと言ったら、お母さんが「気を付けて行って来ないよ」って、「ちゃんと勉強して来ないよ」って言ってくれたと言いました。彼女のその姿が、お母さんを変えたんですね。その時に、彼女は言いました。「私は、差別をしているお母さんや周りの人を変えていける幸せな立場にある。」

僕はこれまで、同和問題学習は、差別を浮けたときの為に、自分の差別心を無くしていく為に、いろいろなことを言われました。それもそうですが、それ以上に、同和問題学習、人権問題学習というのは、部落の人も、部落外の人も、みんな幸せになるために勉強をしているんだよということを、その部落外の子が教えてくれたと思います。

そんな友の会で、みんなで歌を作ろうということになります。その中で思いを出し合っただけなのが、『温もりを感じて』という歌です。最後に一生懸命歌いますので聞いてください。(拍手)

ぬくもりを感じて

作詞・作曲 七草の会

気づくといつも来ている会館 そこにはあたたかいときがある
きのうこんなことがあったよ いまこんな悩みがあるんだ

些細なことでも話し合おうよ 誰にもいえないことも仲間には言える
元気がないとき元気をくれる 心の支え私の宝

信じあえる仲間 あたたかい湯立
私たちの誇り 手を取り合っ

仲間からたくさんの元気と勇気もらって いま立ち上がれ
差別への怒りをもって 現実を見たら仕方ないと言う人もいるけれど
私たちは最後に正しいことが勝つと信じてる

八坂へおいでよ力になるよ 八坂へおいでよ仲間がいるよ
いつまでもいつまでもみんなは一緒 楽しみな土曜日熱いぜ七草

たくさんの人の大きな愛で 私は願生れる未来へ向かって
誇れる仲間がいるから いま私たちは輝いてる

信じあえる仲間 あたたかい八坂
私たちの誇り 手を取り合っ

仲間からたくさんの元気と勇気もらって いま立ち上がれ
差別への怒りをもって 現実を見たら仕方ないと言う人もいるけれど
私たちは最後に正しいことが勝つと信じてる

イエ〜イ

《歌の終了後》（拍手）

《コーディネーター A》

たいしたものです。もう一度拍手をお願いします。（拍手）“信じあえる仲間”という言葉が染みていったと思います。ここに集まった皆さんの一生懸命のまなざしが、その一生懸命学ぼうとする、一生懸命何かをつかもうとする思いが、一人一人の語りを生んでいきました。お父さんの語りが後半にありました。大学3年生の語りがありました。それをこの場で聞けた私たちの誇り。これは、この問題を本気で解決していくという、誇り、生きる自信、そんな私たちの生き方にしていきたいと思います。

皆さんの心の中に、メロディがずうっと流れていると思います。言葉がずうっと響いていると思います。この思いを今晚家族と語ってください。友人と語ってください。飲みながら、食事をしながら、そしてまた、職場の仲間と語ってください。人権を学ぶということがどんなに自分自身を豊かにしていくか。

それぞれの町で、それぞれの地域で、人権の名がつくイベントを組んだ時に、そこに暮らす人たちが、誇りと自信を持って、よろこびを持って集まっていく。そんな人権の町づくりを、そして、そういう日常が当たり前のようになって、安心して暮らせる。しんどいことがしんどいと言える。そんな町づくりを共にやっていきたいと思います。厳しい現実があります。その厳しい現実を直視した時に、やっぱり尻込みする。震えがきます。だからこそ交流です。だからこそつながるんです。だからこそ語り合うんです。

今日、一生懸命聞いていただいたこと、また語ってくれた仲間に対して、アンケート用紙がありますね。何度も言いますが、もう最後に目いっぱい綴っていただければと思います。それがまた、この町を、地域を生きたものにしていくと思います。こんな素敵なチラシを作ってくれました。裏側に男前が写っています。（笑い）見ましたか？これはやっぱり鳴門市の力です。来年も多分こうなりますよね。

やっぱり元気になりますよ。チラシの一番上に握手をしている姿がありますよね。最後に隣に座っている人と…、あまり握りたくないという顔をしている人もいますかね？一言、「頑張りましょうね。」「良かったですね。」というような言葉を交わして、ちょっと握手をしましょうよ。（コーディネーターの言葉に誘われて、会場内で笑顔の握手と言葉があふれる）

ちょっと声を掛けるだけで、ちょっと手を握るだけで、隣にいる人の笑顔がパッと広がります。自分の笑顔もです。そういうつながりをつくっていきましょうよ。最初にも言いました。「言葉は人を生かします。でも、言葉は人を殺すことだってあります。」人を生かし、人をつなげていく、そんな語り合いが広がったらと思います。

この後、閉会行事がありますので帰らないでくださいね。本当に今日はありがとうございました。これで、2005年度人権地域フォーラムを終わります。（拍手）

終了